South Pacific Studies Vol. 27, No. 2, 2007

東アジアにおける闘牛と「周辺ー周辺」ネットワークの形成

桑原季雄・尾崎孝宏・西村明

Bullfighting and the Formation of 'Periphery-Periphery' Network in East Asia

KUWAHARA Sueo, OZAKI Takahiro, NISHIMURA Akira

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University, Kagoshima, 890-0065, Japan

Abstract

This article tries to analyze the present situation of bullfighting in Japan, China and Korea, and especially the process of network formation through bullfighting and its traits in Japan. The venues of bullfighting games are mainly those peripheral areas such as remote islands, remote country districts, and rural farming villages. However these areas are active in the exchange of men, bulls and information, and even go further to organize 'All Japan Bullfight Summit'. This fact tells us that these areas cannot simply be understood by the binary oppositional scheme of 'center-periphery', but rather show the possibility of the existence of a new social relation which fits in a time of globalism. Furthermore, the network that is formed among the venues of bullfighting can be characterized as 'periphery-periphery' network. Previously, peripheral areas had always been taken as subservient to the center. This article depicts rather a different picture in which the peripheral areas are active with each other by forming bullfight network. Furthermore the formation of this 'periphery-periphery' network could mean not only to be a mirror to reflect the degree of the progress in globalization but also to be an another entrance to globalism.

Key words: bullfighting, bullfight network, East Asia, globalism, 'periphery-periphery' network

はじめに[1]

2004年10月23日に新潟県長岡市を中心に大きな地震があり，中越地方一帯が深刻な被害を受けた。中でも最も被害が大きかった地域の一つが闘牛で知られる山古志村（現長岡市）であった。その山古志村の牛はその後南へ1500キロメートル以上も離れた徳之島に緊急避難的に送られ，現地の闘牛大会にも参加していたことがわかった[2]。こうした事実から，闘牛の盛んな地域同士の間に緊密な闘牛のネットワークが存在することわかる。また，闘牛の開催地あるいは生産地として知られる沖縄，鹿児島，愛媛，島根，新潟，岩手の６県[3]の間に，闘牛の主催者団体・参加者・牛のいずれのレベルにおいても広域的な「闘牛ネットワーク」が形成されていること，そしてこのネット上を人・牛・情報が往来していることが予測される。さらに，現在，日本国内で闘牛が行われているこれらの地域は，既存の開発論で顕著

に見られる直線的発展段階論に即せば,「進んだ中心」に対する「遅れた周辺」に属するといえる。つまり，そこで想定されてきた関係性は「中心－周辺」を主たるモチーフとするものであり，当然ながら両者の関係は対等ではなく，中心が高く周辺が低い垂直的な関係であった。しかし，近年，世界的に顕著なIT革命に伴う情報流通体制の変革，特にインターネットの特質である「無頭的」なネットワーク構築の拡大は，こうした中心を介さない社会的ネットワーク構築を可能ないしは容易にした。これがまさに，筆者らの主張する「周辺－周辺」ネットワークに相当する。本論で扱う闘牛ネットワークは,「闘牛という，かつては地域社会内部の民俗的慣行として理解されていた複数の事象が,闘牛を構成する様々な要素が半ば独立的に,半ばリンクしつつ，ただしいずれも中心的存在を介することなく，直接的に結びつくことによって成立したネットワーク」（尾崎ほか 2006）と言い換え可能である。その際，筆者らの「闘牛ネットワーク」に対する視角として強調しておくべき点は,それを「周辺－周辺」ネットワークの一事象として位置づけている点である。「周辺－周辺」ネットワークという表現は筆者らの造語であるが，それは簡単に言えば「国家や都市といった中心性を媒介しないネットワークの形態」（ibid.）である。こうしたネットワークに関する分析は，これまでほとんど行われてこなかった。そこで，本稿では，闘牛という文化イベントに着目し，闘牛を媒介にしたネットワーク形成の現状分析から，東アジア沿海地域における，文化イベントを焦点とした地域間交流の可能性を提示しようと意図する。また，日本国内の闘牛牛，牛主，闘牛開催地の各種団体，観客などを巻き込んで成立している広域的な社会ネットワークである「闘牛ネットワーク」に関して，その形成過程や特質の多角的な分析を試みる。

以下，本稿では，まず第１節において，闘牛に関する先行研究について分析を行った後，第２節で，東アジアを構成する日本，中国，韓国における闘牛の現状について報告する。そして，第３節において，闘牛ネットワークの形成に重要な要因として，まず最初に，個人レベルで闘牛ネットワークの存立を基本的な部分で支えている牛主に注目する。次に，闘牛に関する情報のハブとしての可能性に開かれている闘牛資料館および牛の博物館についてみていく。そして最後に，全国レベルでの闘牛ネットワークの組織化の一例として,「全国闘牛サミット」をとり挙げる。かくして，個人，地域，全国といった各レベルでのネットワークの形成過程について記述し，考察を加えてみたい。

闘牛に関する先行研究

日本各地に点在する闘牛は既にいくつかの専門分野で研究対象となっているが，これらの研究はその大半が，一地点における定点観測的な研究およびその集合体としての比較研究として行われている。しかし現状は，上述のごとく2004年10月に発生した新潟県中越地震で被災した牛が徳之島に避難して現地の闘牛大会に参加したというニュースに代表されるように，闘牛に関係する地域間で広域的なネットワー

クが形成されている。ただしこうしたネットワークに関する分析は，従来の定点調査においては不向きな研究対象であるがゆえに等閑視されてきた。以上のような認識の根拠となる先行研究のレビューを次に行おう。まず，既存の論文や著作について，その対象地域ごとに分類すると，徳之島に関しては 6 点（小林 1997，曽我 1991，松田 1982，山田 2001，2004，穂積 2004），沖縄の闘牛については 2 点（謝花 1989，前宮 1972）の論考がある。愛媛に関しては石井（1992，1993），石川（2004），愛媛県教育委員会文化財保護課（編）（2002）の 4 点があげられる。さらに隠岐，岩手に関してはそれぞれ山田直己（2002，2003）と藤原弘（2001）による研究がある。新潟および愛媛の両地域を扱ったものとしては広井忠夫（2002）のものが，また多地域にまたがるものとしては石井幹（1989，1990a，1990b），広井忠夫（1998），松田幸治（2004）の研究があげられる。

この中で，最後に挙げた多地域に関するものは，基本的に各地の闘牛の現況紹介である。また，そのうち広井（1998）の主たるフィールドは新潟で，松田（2004）は徳之島である。そのほか，山田と石川が 2 箇所のフィールド調査経験を持つが，それ以外については 1 箇所のフィールドのみに関する著作である。つまり，上述の21点のうち10点，16著者のうち 9 著者がそれに該当する。いずれから計算しても，半数近くは 1 箇所の闘牛にのみ関わる文献であると結論できる。

一方，地域別の分布については徳之島と愛媛が他の地域よりも数的に多く，比較的研究が進んでいる地域と位置づけることができよう。そのうち，徳之島は民俗学者とジャーナリストの独壇場であるのに対し，愛媛については民俗学に加え人類学（スポーツ人類学）・地理学（民俗地理学）と研究者の専門分野の幅が広いのが特徴となっている。そこにはいわゆる「伝統」のみならず，広く社会経済的な現象に目を向けたスタンスが取られている。しかし，これらの著作が民俗学的研究を目指す以上，ある行事を通じて地域共同体を浮かび上がらせるというテーゼから完全に自由であることは困難であろう。例えば，曽我は牛の売買に関する詳細な報告を行うにもかかわらず，最終的には「闘牛は『ランク』の頂点を目指しておこなわれるゲームである（中略）牛のランクもまた持ち主に転嫁されていると考えられる」（曽我 1991：44－45）と，彼らの意味の世界にその着地点を求める。また山田は「闘牛の社会経済的考察」と題した論文で「闘牛は徳之島というやや自己完結的な社会の中で，非常に重要な社会的機能をになってきた」（山田 2004：215）と，やはり共同体内部の論理を模索する。なお隠岐に関しても，研究者が同一である以上，似たような研究傾向が見出される。沖縄に関しては，意外にも近年の文献が存在しないこともあり，現状報告を超えた理論的研究という点では最新・最先端とは呼びがたい状況にある。

しかし，山田が上記論文を発表する数年前，既に広井は徳之島の闘牛牛について「今では新潟経由ではなく直接岩手県に行って仕入れてくる。軽米町，山形村などによく見に行くという」（広井 1998：32）と記述している。また，徳之島では八重山産の牛が多いと語る観客（ただし本人も牛主である）が存在し，また徳之島と沖縄本島を頻繁に往復する牛・牛主・勢子などは珍しくない。つまり少なくとも闘牛

に関しては，徳之島は自己完結的ではない。またそれゆえに徳之島の闘牛は，ローカルな意味の世界だけでは把握しきれない豊富なボキャブラリーを含有する事象なのである。

研究の幅がより広いと思われる愛媛の研究については，同時代的な事象に最も強い関心を示している石川（2004）の研究がある。そこでは，徳之島から宇和島へスカウトされてきた勢子の事例紹介など地域を越えた闘牛を巡る社会的ネットワークの存在が示唆されている。しかし，最終的に議論は「宇和島地方での闘牛の存続要因」の解明へと収斂し，広域的なネットワークは地域に関する議論の背景へと押しやられる（石川 2004：964－970）。

以上のような先行研究のレビューを通じても，主催者団体・参加者・牛が形成する広域的なネットワークの調査研究は，従来着手されていない研究であることが明らかであろう。

我々は，これまで，沖縄，徳之島，宇和島の闘牛に関する予備調査を行い，各地の闘牛に関する基礎的資料を報告書にまとめ（尾崎ほか 2006a，2006b，桑原ほか 2006），さらに上記の3つの闘牛開催地域の比較研究も行った（西村ほか 2006）。前者の調査報告書では，闘牛という文化イベント(4)を通じて国内のいくつかの地域に，広域的なネットワークが存在する事実を指摘した。また，従来の闘牛研究において，こうした地域間を結ぶ牛と人のネットワークの形成に関する研究がほとんど着手されてこなかったことも合わせて確認した。さらに，後者の比較研究においては，「動態的な闘牛文化のネットワーク」の存在を浮き彫りにし，ネットワークという発想が，「牛同士の競技」である闘牛が日本各地や韓国や中国など東アジアの特定地域に現実に偏在しているという事実をひとつの問題系として考える手がかりとなることと，闘牛開催地と闘牛牛の生産地という，このネットワークを構成しているノードが，主に，離島・僻地・農村といった後進的・周辺的性格を有してきた地域同士での人や牛や情報の交流であり，単純に先進的な都市と後進的な僻地という「中央－周辺」的な二項対立図式では理解できない問題であることを指摘した。

以下では，日本，韓国，中国の闘牛の現状について紹介する。日本については，沖縄，宇和島，徳之島の3つの地域の闘牛大会について最近の調査資料をもとに紹介し，韓国と中国については，現地調査による資料がえられていないので，韓国の闘牛についてはインターネットのホームページの検索などから得られた資料を，また中国の闘牛については文献資料をもとに紹介する。

東アジアの闘牛の現状

日本の闘牛

日本で現在闘牛がみられるのは，南から沖縄（うるま市），鹿児島（徳之島町，伊仙町，天城町），愛媛（宇和島市），島根（隠岐の島町(5)），新潟（小千谷市(6)，長岡市(7)），岩手（久慈市(8)）の6県9市町である。中でも現在最も盛んなのが沖縄，鹿児島，愛媛の3県である。また，沖縄には沖縄市，うるま市，宜野湾市，本部町，

今帰仁村，読谷村の６市町村に11ヶ所，徳之島には３町に13ケ所，そして愛媛県では宇和島市に１ヶ所の闘牛場があり，１年を通して闘牛大会がそれぞれ30回，20回，5回ほど開催されている。中でも徳之島では，全島一の横綱を決める大きな大会が１月,5月，10月の年３回，しかも徳之島町，天城町，伊仙町の３町持ち回りで，午前中から開催されるが，その他の闘牛大会の興行は，いつでも誰でも開催可能である。

そこで，徳之島の全島一の試合の様子を実見に基づいて述べれば，以下のようになる(9)。まず，闘牛が一頭ずつ花道からワイド，ワイドの囃子と太鼓に先導されて入場する。普通，取組は10戦あり，東西に分かれて番付の低い方から順に戦われる。試合開始前に，土俵中央で，塩と焼酎で土俵を浄める簡単な儀式が行われる。試合開始後の儀礼としては，対戦の合間には通例，主催者代表による挨拶がある。とりわけ全島一大会ともなると，対戦の途中，場内アナウンスで，地元出身の衆議院議員からの祝電の披露やスポンサーのレストランの宣伝やスポーツクラブの案内のほか，優勝旗の返納の儀式では，徳之島闘牛連合会長の挨拶などが行われる。場内アナウンスで，徳之島警察署よりのお願いとして，闘牛賭博をしないようにとの放送もあった。

審判団は３町から１人ずつ３名があたり，白旗を挙げて勝敗を判定する。勝負がつかない場合は，実況アナウンサーは観客に，引き分けにしていいかどうかを拍手でもって問う場面やじゃんけんで決める場面も見られた。大会の開始から終了まで要する時間は，短いので約２時間，長いのになると３時間以上になる。勢子は３人ずつと決められており，東西に分かれて赤と白のハッピを着けることになっているが，３人の勢子が短時間で頻繁に交代する。若い勢子の姿も多く目についた。勝敗はどちらかが逃げると決着し，すぐさま勝った牛の持ち主とその家族や関係者が土俵になだれ込んできて，ワイド，ワイドの掛け声とともに牛の背に飛び乗って手舞い足舞いで喜びを表現する。横綱戦が終了し，主催者側からすぐに優勝旗とトロフィーが牛主に手渡され，すべてが終了する。以上のような試合の流れは全国どの地域でもほぼ共通する。

徳之島の闘牛は，県や町などの行政の援助も無く，また無形文化財でも無く，闘牛好きな有志たちの活動だけで成りたっている。一方，沖縄本島では，徳之島以上に闘牛が盛んで，2005年は年間34回もの大会が組まれている。主催者が闘牛組合，共催が琉球新報社，後援が沖縄タイムス社となっていることが多い。地元新聞が，沖縄本島地域の闘牛大会の開催を支えている。さらに，宇和島の闘牛大会は，定期闘牛大会が年に５回開催されている。2005年の秋場所定期大会では，主催が宇和島市観光協会，主管が宇和島闘牛運営委員会となっていて，会場も宇和島市の市営闘牛場である。

このように，主催者でみると，徳之島では各町の闘牛協会主催のもと，徳之島闘牛連合会が後援し，また，沖縄でも闘牛組合が主催し，地元新聞が共催となって支援しているのに対し，宇和島では，市の観光協会が主催し，宇和島闘牛運営委員会が主管となっていることや，市が闘牛場を運営し，闘牛大会で市長の挨拶があるこ

となどから，行政が闘牛大会を明確に観光の目玉と位置づけて支援し，観光化を促進していることがわかる。沖縄も観光客をあてこんで闘牛大会を頻繁に開催しているが，宇和島ほど行政が全面に出てきてはいない。これに反して，徳之島の闘牛大会は前２者と比較して，最も観光化が進んでおらず，また観光化にそれほど力を入れているようにも見えない。むしろ，主催目的が同窓生の記念行事や厄払い行事として開催する大会も多く，正月，ゴールデンウィーク，お盆などの帰省客が多く島に帰るときは，連日どこかで大会が催され，観光客よりも帰省客に楽しんでもらおうという雰囲気がある。また，闘牛牛に牛主の名前や会社名，グループ名をつけることが多いことから，仲間で牛を持ち，連帯感を強め，喜びを分ち合っているようにも見える。

さらに，徳之島では，闘牛大会が島の経済構造や生活のリズムと深く関係している点が大きな特徴として指摘できる。即ち，徳之島の主たる生業はサトウキビの生産であり，正月休みを除くと，サトウキビの伐採が始まる12月から製糖期間が終了する４月末までが闘牛のオフシーズンとなり，それに合わせるように５月には早速闘牛大会が開催され，労働の疲れを慰撫するかのような社会的機能が見られる。闘牛が中心軸となって年中行事などのリズムが枠つけられていくというように，闘牛が人々の経済・社会活動を活性化しているともいえる（山田 2004：215）。

このように，徳之島の闘牛において観光化にそれほど力を入れていないように見えるのは，大都市圏に近い宇和島やマスツーリズムが定着している沖縄と違って観光客の集客力が極めて小さいため，島民の生計が観光ではなく農業を基盤としていることがあげられる。それ故に，徳之島の闘牛はむしろ社会的成功，娯楽，賭博といった要素が強い。さらに，徳之島の人にとって闘牛牛を所有することは祖先崇拝，家，一族の宝，家の繁栄の象徴であるといった意味づけがなされることもある（小林 1997，山田 2004：215）。即ち，牛の勝利が祖先を慰め，子孫の繁栄を約束するとされるため，牛の勝敗に固執し，とりわけ，全島一（横綱）の闘牛牛を育て上げるのが牛主の夢である。そのため，闘牛は，ランクの頂点を目指しておこなわれ，その牛のランクもまた持ち主に転嫁されている（曽我 1991：44－45）。こうして闘牛は徳之島という社会の中で,非常に重要な社会的機能を担ってきたのである。

観光化の度合いは，闘牛場の造りや観客の収容能力にも見てとれる。観光化が進んでいる宇和島と沖縄では闘牛場がドームになっていて全天候型になっている。とりわけ宇和島の会場は16角形のドーム型で雨天でも開催でき，収容人数も，沖縄と宇和島ではそれぞれ，３千人から４千人収容可能ということで，これも観光客を当て込んでのものであるのに対して，徳之島には13の闘牛場のうちドームになっているのは１箇所で，また，闘牛場の多くは，収容能力が宇和島や沖縄のほぼ半分である。常夏の沖縄では，客席の外側には，ナイター設備があり，９月末から６月頃までの比較的涼しい期間は正午あるいは13時に開始し，夏場の暑い時期は16時や18時といった遅い時間にずらしているのが特徴的である。他方，同じ常夏に近い気候の徳之島では，年３回の全島一大会は，午前10時開催ということからも，朝早くから出かけてきて，しかも屋根のない会場で強い日差しにさらされて観戦しなければな

らない観光客の便宜を考慮しているとは言い難く，島民による島民の楽しみのための闘牛という趣向が強く感じ取れる。

闘牛大会開催の形態については各地域ともほぼ共通している。即ち，入り口のテントの設営と切符の販売，すり鉢状の階段席，飲食店やビデオ販売店などの出店など，会場の形態はどこもほぼ同じである。また，３千円の入場券と対戦表（プログラム）が手渡される点も共通である。さらに，沖縄と徳之島ではともに，徳之島の島唄「ワイド節」が，また宇和島では「宇和島音頭」が流されるなど，自前の闘牛ソングが準備されている。当然，こうした共通性は，闘牛関係者の相互交流や相互の往来によってもたらされてきたものと思われる。さらに，宇和島では，牛が入場してくる際には，進軍ラッパや太鼓，指笛などの鳴り物が使われるようになったのは，徳之島や沖縄から牛を購入することによって，売主関係者が応援にくるようになったためとされ，特に徳之島の闘牛の影響が濃厚といえる。これら３地域の交流の形跡は，牛の角の変化と勢子の構えとの関係にも見てとれる。

徳之島では，昔の闘牛牛は島内産が多く占めていたが，最近は十島村，沖縄，八重山，隠岐島，新潟，岩手，宇和島など日本各地から導入している。また，直接岩手県に行って仕入れてきたりする一方で，徳之島の闘牛牛の多くは八重山牛だという話もある。また，沖縄では，取り組み表に産地が明記されているものの中で，１トンを超えるような横綱クラスの大型牛は岩手産が目立っていたがが，全体的には徳之島からの牛の比率が多かった。さらに特徴的なことは，徳之島の勝利牛を沖縄にトレードしてきた例が多く見られたことである。ここから徳之島と沖縄とのあいだには頻繁な交流が存在していることがわかる。また，宇和島では，かつては隠岐産の牛が多かったが，現在は，沖縄（本島・八重山）産や徳之島産の牛が多く認められる。宇和島は牛の産地ではないため，当初は対岸の大分（玖珠郡・大野郡）や熊本から農耕牛を買い付けて，その中から闘牛牛を育てたという話もある。こうした他地域との牛の交流によって，宇和島には元来の九州牛以外の牛が多く登場し，宇和島の闘牛に変化をもたらしている。それは，牛の入場，土俵入り，勢子のスタイルの変化などに表れている。従って，牛の交流が人の交流を促し，他地域の闘牛文化が流入し，もともとの宇和島の闘牛のあり方に大きな影響を与える結果となっている。

韓国の闘牛

韓国の闘牛は，慶尚北道の清道（チョンド）郡で毎年韓国の全国大会が開催されている。また，韓国との交流は1999年に和牛３頭を韓国へ２年続けて送り，韓国の赤牛と対戦させたことに始まる。日韓戦と銘打ったおかげで，釜山の近くにある知名度の低かった清道郡の闘牛場は，総計数十万もの観客を集めるほどの大イベントが開催できたとのことであった。また，徳之島へも親善大使や全国闘牛サミット（2002年の第５回と2005年の第８回，2006年の第９回）へ来賓が訪問したりするなど，ここ数年「国際的」な闘牛の交流が展開されてきている。さらに，韓国の闘牛業者も一度徳之島に来島し，徳之島の牛を買って伊仙町から韓国に船で移送したこ

ともあった。しかし，狂牛病の問題が発生してからは，韓国でも牛の輸入が禁止となり，日韓交流戦はなくなったが，韓国の闘牛の活性化と闘牛関係者同士の交流には大いに貢献した。また，清道以外にも慶尚南道の晋州（チンジュ）市や全羅北道の井邑（チョンウップ）市などでも闘牛大会が開催されている。

清道や晋州の場合に共通して見られる特徴は，闘牛による地域振興を意識的に展開している点であり，１万人以上を収容する大規模な闘牛場の整備や，闘牛のキャラクター化による経済的展開などが図られている。とくに晋州では，そのような闘牛の観光資源化をとおして，農村地域開発と畜産振興，伝統的な闘牛文化の活性化がはかられるとともに，闘牛場を複合的な娯楽・余暇施設として市民に提供する事業が行なわれようとしている(10)。ただ，現在の韓国内の闘牛開催地間の牛・人・情報のネットワーク形成については，今後の現地調査による解明を待つしかないのが現状である。

中国の闘牛

現在，「闘牛ネットワーク」の現実的な広がりは，日本と韓国に限定されている。しかし，そもそも闘牛ネットワークの成立要件を考えた場合，闘牛という行事の存在が決定的に重要である。東アジア沿海地域における文化史レベルでの闘牛の広がりを論じるに当たっては，ウシという家畜の直接的な移入元と想定しうる東アジア大陸部の闘牛について何らかの形で検討する必要があるだろう。そこで本節では，中華人民共和国の闘牛の現状について，主に文献研究に基づき概観したい。

現在の中華人民共和国で闘牛に関する言及のある地域は，いわゆる西南部の少数民族地域，具体的には貴州省・雲南省・広西チワン族自治区にほぼ限定されている。唯一の例外は浙江省西部に位置する金華市の闘牛に関するものであり，『金華県誌』などの地方誌や金華市を紹介するネット上のコンテンツに少ないながらも言及がある（金華県誌編纂委員会（編）1992：699－701，金華新聞，浙江省の民俗風習）。

金華闘牛は，11世紀前半に始まったとされており，20世紀初頭に盛んであった。２～６歳の雄の「黄牛」（東南アジアから中国に分布する家畜ウシの総称）を使う。一般に廟会に際し廟近くの水田もしくは野原で奉納として行われていた。中華人民共和国成立以後，闘牛は停止していたが，1985年に復活した。ただし，1985年４月に10万元を投下して金華県中心地にオープンした闘牛場は経営不振のため1987年７月に閉鎖された。なお，金華県は1992年に第一回「闘牛節」を開催し，2003年２月の時点では継続している。

これに対し，西南部地域の闘牛に関する言及は圧倒的に多い。中華人民共和国で出版された一般書である『中国少数民族常識』（中国青年出版社，1984年）を再構成して翻訳した『概説　中国の少数民族』では，伝統的競技に関する記述の一部として闘牛が以下のように取り上げられる（馬寅（主編）・君島久子（監訳）1987：73）。

闘牛はミャオ，トン，イなどの民族が，祭りのとき行った。ミャオ族の闘牛は，山の斜面に囲まれた平地で行われ，周囲の斜面が自然の見物席となった。闘牛を見

物する人々は，祭りの盛装をし，黒山のような人出で，時には一万人を超すこともあった。闘牛は最初，牛の目を木の葉でおおい，二つの村の人がそれぞれ牛を引いて入場してくる。その後で，すばやく木の葉を取りのぞき，二頭の牛を合わせる。牛が興奮してくると，激しい戦いがはじまる。この時，見物の人々は喝采して応援し，歓声が山谷に響きわたる。勝った村は，牛に紅絹や銀をかけ，爆竹を鳴らし，音楽をかなでながら牛を連れて帰るのである。村に帰ってから祝賀会を開き，牛に腹いっぱい食べさせ，飼い主に賞を与えた。ミャオ族には清代中葉から伝えられている「ミャオ族闘牛歌舞図」が存在するので，闘牛の習俗は数百年の伝統があったことがわかる。

イ族の人々は，「火把節（たいまつ祭り）」の闘牛の時，各村々から数百頭にも及ぶ牛を率いてきて，試合に参加する。普通は一対一で戦い，五度連勝すると優勝し，飼い主に商品が贈られる。

闘牛を行う数多くないイ族のうち，雲南省路南イ族自治県のサニ（撒尼）と呼ばれるグループの闘牛に関する報告を抜粋すると以下のようになる。

太平盛会は相撲と闘牛で表現する時期不定の迷信活動である。この種の活動は毎年あり，盛大なものは時に数千人に達する。一般に村内の人畜に病気がある，あるいは不吉な事柄があると，ビモ（宗教職能者）を呼んで神を祭り，某月某日に相撲を行うと決定する。（中略）少なからぬ村が闘牛用のウシを飼っており，太平盛会の際だけに闘牛を行う。（蘇（調査整理）1986：298）

1999年，建国50周年事業として出版された『彝（イ）族文化大観』という雲南省民族事務委員会が編集した本では，「娯楽習俗」と題したセクションで「競技の内容は非常に豊富であり，もっとも普及しているのは相撲，弓，競馬，闘牛などである」（雲南省民族事務委員会（編）1999：215）と紹介されている。闘牛がイ族の文化要素として国家サイドに認知されている現状がうかがえる。

貴州省を中心とするミャオ族については，全てのミャオ族が闘牛を行っているわけでもなく，また闘牛の行われる機会も均一ではないが，広範囲にわたる地点で闘牛に関する言及があり，また同一地域で複数の機会に闘牛が行われているという報告が存在し，かつその記載の情報量が圧倒的に多い。清代18世紀に作成された『清朝職貢図』の写本である『広輿勝覧』の「白苗」の項にも「強健な雄牛を選び，各村のものと闘牛させ，勝てば即ち吉とする」（李澤奉・劉如仲（編著）1997：173）という記述がある。また情報量という点では，台江県のものが群を抜いている。『台江県苗族的節日』に掲載されている闘牛に関する情報について，ごく簡単に紹介するだけでも以下のような分量と具体性を伴ったものとなる（全国人民代表大会民族委員会弁公室（編）1958：９－11）。

苗年（ミャオ族の正月）の期間中，最も群集をひきつけられる祝祭活動は闘牛である。闘牛は苗族の老若男女が皆好む娯楽で，そのために極めて広範な群集をひきつけることができる。闘牛に参加する村の群衆はもとより喜び勇んで闘牛を鑑賞しにやってくるのみならず，近隣のほかの村からも，往々にして多くの人々が賑わいを見物に来る。人口の比較的まばらな苗族の村に，闘牛のときは，1－2000人から５

－6000人がともに祝祭を過ごす偉観が出現する。例えば，1956年の第１回目の苗年には，近隣の４村が，４村境界地域の闘牛場に集まり闘牛を行い，1000人が参加した。（中略）それぞれの村には自らの小型闘牛場が備えられており，また近隣のいくつかの村ごとに共有の伝統的闘牛場もある。闘牛場は，一般には真ん中に奥行き10メートル，幅50メートル程度の平地をもち，周囲には丘があり村ごとに自らのウシと人々を配置するのに便利なようになっている。（中略）闘牛は，一般に決められた日の午後１時前後に始まる。各村の闘牛を管理する責任者が共同で取り組みを協議し，主に力量の見合ったウシを取り組ませる。（中略）現在台江では一頭の水牛が100元あまりであるが，闘牛の強そうなウシであれば，価格はもっと高い。闘牛に用いるウシは，すべて雄の水牛である。

台江の事例に関して，闘牛が「辺鄙な農村と高い山肌に住んでいるミャオ族人民には，歌と踊り以外では，闘牛が最も好まれる娯楽」であり，さらに，闘牛ウシに対する情熱や闘牛に対する熱狂も格別のものがあると報告しており，まさに闘牛が彼らの文化における中心的なテーマの一つであると理解しうる（全国人民代表大会民族委員会弁公室（編）1958：41）。

以上の記述から，貴州省を中心とする山岳地域の非漢族的な人々の間で広範囲に闘牛が行われていた事は確実である。また，浙江省金華県という，山がちで，漢族地域としては周縁的な場所性と，ミャオ族の原住地伝説においてしばしば言及される湖南省という地域の意外な近接性は，長江中下流域に東アジアの闘牛文化の発祥地を求める仮説への誘惑を引き起こす。

雲南省でも北部に居住する麗江近辺の山地でも闘牛が行われている。現地の住民は現在ナシ族に分類されている人々であるが，陰暦６月25～27日の火把節の際に闘牛を行う（宋 1985b：57，董・雷 1985：268，李近春（収集整理）1986：51）。麗江の市街地は標高2400mに達し，可耕地は河谷沿いの低地に限られ，同じ山地と言っても貴州などのミャオ族が分布する焼畑耕作の可能な地域とは生態的にも大きく異なっており，事実周囲にミャオ族地域は存在しないし，ウシは黄牛とチベット原産のヤクしか存在しない。

両者の共通点を挙げるとすれば，そこに何らかの「周縁性」の共有が見られることである。金華県と貴州は，漢族社会と少数民族社会，つまり水田農耕が卓越する平地的な大規模な社会と焼畑などを行う山地的な小規模な社会に境界線を引くとすれば，漢族社会の側から見て境界線のやや手前側と向こう側に属する。逆にナシ族社会は，中央アジアからモンゴルおよびチベットに至るステップ牧畜地域のまさに辺縁部である。農耕に牧畜が加わる場所と牧畜に農耕が加わる場所で奇しくも闘牛が行われるという事実の意味についてはさらに考察が必要であろう。

以上，本節では，日本，韓国，中国の各地域にみられる闘牛について現在我々が知りうる状況を示してきた。これらに共通して言えることは，いずれも「周縁性」という特徴にある。上述のように，闘牛に関係する日本の６県は，いずれも日本国内の周辺に位置し，周辺から牛や闘牛に関する情報を発信しつつある。また，韓国においても闘牛開催地は慶尚北道や慶尚南道，全羅北道といった周辺に位置する地

域であるが，これらの地域が闘牛を通してどのように結びついているのか，その詳細は不明である。中国でも闘牛が盛んに行われてきたのは雲南省や貴州省の少数民族であるように中央の漢民族に対して周辺に位置する地域である。特に，ミャオ族については，広範囲にわたる地点で闘牛に関する言及があり，また同一地域で複数の機会に闘牛が行われているという報告が存在し，かつその記載の情報量が圧倒的に多い。従って，中国では，貴州省を中心とする山岳地域の非漢族的な人々の間で広範囲に闘牛が行われており，場所によっては200年前にも闘牛が行われていたことがわかる。最も新しいところで,2002年に雲南省のイ族の地域で貴州省から来たミャオ族の人たちによる闘牛が開催されている（岡部 2004：41）。ただ，中国の闘牛に関しては，個別地域の闘牛に関する記述はミャオ族の正月の闘牛の記述に見るように大変詳しいものが存在するが，他の闘牛開催地との関係の交流の状況についてはほとんど解明されていない。従って，今後の我々の闘牛研究の大きな課題の一つは，こうした地域の情報を踏まえて，韓国や中国など東アジアにおいて詳細な現地調査を敢行し，同時代の闘牛開催地間の闘牛ネットワークの形成の実態を早急に解明することである。

もう一つの大きな課題は，そうした現地調査に基づく資料をもとに，多くの闘牛開催地が共有する「闘牛と周縁性の関係性」の解明に向かうことである。例えば，折江省金華県という漢族地域としては周縁的な場所性と，貴州省の山岳地域でみられる闘牛との間には，あまりに異なった生活世界が展開していることや，両者の接触は少なくとも日常レベルではありえないことなどから，伝播論的仮説の可能性は考えにくく，むしろ独立発生論の可能性の方が妥当性がある。即ち，農耕に牧畜が加わる場所と牧畜に農耕が加わる場所で奇しくも闘牛が行われているという事実の存在と，この意味の更なる考察についても，今後の大きな課題である。

闘牛ネットワークの形成

牛　主

本節では，日本で唯一の闘牛資料館のオーナーであり自前の闘牛ドームを持って闘牛の振興に尽力する伊藤範久氏への聞き書きを元に，闘牛ネットワークの形成過程についてみてみたい(11)。

伊東範久氏は，昭和30年に徳之島町に生まれ，高校１年生の頃から闘牛を始めた。当時，闘牛の牛を飼うことは徳之島の高校生にとっても唯一の楽しみであった。最初は徳之島産の子牛を親から貰って育てたが，高校を卒業後，島外に就職していき，初めは静岡に，その後は大阪で３年ぐらい滞在した。都会に出て仕事をしている間は牛の世話は牛の餌代を送って弟にしてもらった。徳之島に帰郷後，昭和58年に徳之島町で居酒屋を始めた。店の営業は当初から順調だったため，それからまた牛を飼って闘牛をやり始めた。ところがその当時の持ち牛は弱くて連敗を重ねたので，岩手県から大きくて強い牛を買い始めた。

闘牛の転機は，昭和57年に伊仙町の人から230万円で買った720キロの牛によって

もたらされた。この牛は，27回の対戦で負けたのは3回だった。その後，伊藤氏はこの牛を11歳で売りに出し，八重山の人に買い取られ，そこで種牛になった。その後は，南部牛の雄牛に沖縄のホルスタインをかけあわせた闘牛も所有したことがあり，11回優勝したあと沖縄の闘牛関係者に売った。

伊藤氏は6年くらい闘牛を止めていた時期に，子牛を求めて各地を訪れ，直接買い付けてきた。なかでも岩手県には度々足を運んだが，伝手がないので，自分の足で牛を探してまわった。2回，3回と訪れていくうちに信用ができて知り合いもできた。こうして岩手県では，山形村（現久慈市）や遠野村，それに軽米町から子牛を買ってきた。例えば，遠野村で子牛を3頭買ってきたときには，まず，徳之島から北へ約2000キロメートルも離れた岩手県三沢市に飛んで，三沢市から車で山形村に入り，山形村からさらに6時間ぐらいかけて遠野村に行って，そこでようやく子牛を見つけて買ったのだった。買い付けた子牛はトラックで東京まで陸送し，東京の港から船でいったん奄美大島の名瀬港まで運び，名瀬港から別の船に移して徳之島へ運んできた。当時，運賃だけでも約20万円かかったという。また，愛媛の宇和島で子牛を3頭買ってきたこともあったが，この時は，自分の牛と宇和島の牛との物々交換だった。

そもそも岩手に牛を買い付けに行くきっかけは，沖縄など各地の闘牛場で岩手牛が活躍しているのを見たり，牛自体の体が大きかったからだ。沖縄の大きい牛もその多くは岩手から買ってきていたので，自分で直接現地に行って成牛ではなく子牛を買って来て，子牛から鍛えてみようと思い実践してきたのだった。実際，岩手から南部牛の子牛を買ってくるようになったのは平成5，6年頃からだ。それまでは沖縄やその他各地から牛を買って徳之島に持ってきていた。特に，知り合いの仲買人が沖縄の出身だったので，沖縄から牛をよく持ってきたという。また，伊藤氏が特に南部牛を好むのは，厳しく鍛えれば強くなるからだ。実際，180万円で岩手から買ってきた南部牛の子牛は鍛えれば鍛えるほど筋肉がついてきて大きくなる。他方，八重山産の牛は，体は小さいが，「負けても負けても喧嘩」する。また，純徳之島産の牛というのは700キロぐらいの牛であるが，現在，どの牛も品種改良されていて大型化している。新潟産の牛も体が大きく，山古志村から直接買いつけてきたことがあるという。最近宇和島からも子牛を3頭買っている。また，伊藤氏が所有していた4連勝中の牛を宇和島の友人に送ったという。沖縄については，闘牛の盛んな本部，島尻，うるま，具志川の各地との間で，子牛を買ったり，送ったり，贈ったりという関係を続けているのだそうだ。

以上のように，伊藤氏の場合，子牛の買い付けのために岩手県や新潟県，愛媛県，沖縄県など，まったくネットワークのない現地に直接飛びこんでいって，訪問の回を重ねる中で現地の人との間に「信用」を築いていき，かくして牛の売買と情報のネットワークが形成されてきたのである。

闘牛博物館

2006年に，徳之島町亀津の闘牛場「伊藤観光ドーム」の敷地内に「闘牛資料館」

が完成し，５月３日の全島一闘牛大会に合わせてオープンした。上述の伊藤範久氏が私財を投じて建設したもので，館内には徳之島闘牛の歴史年表や歴代チャンピオンの写真などに加え，闘牛に欠かせないラッパやハッピ，優勝トロフィーなどが展示されている。名勝負を収めたビデオなどが観賞できるビデオルームも備えている。また，館内でビデオ販売や闘牛関連の写真本なども扱う。この闘牛資料館は，展示情報が極めて限定されているが，その他の資料館にない特徴がある。即ち，資料館の隣に４千人収容可能なドーム型の闘牛場と牛舎，それに十数頭の闘牛がおり，実物がいわばセットになっていることである。観光客は，資料館を見た後，闘牛ドームの中を見学したり，牛舎の闘牛を間近に見ることができる。また，従業員が牛舎から闘牛を連れだして，簡単なトレーニングを行う様子を見るチャンスもある。この資料館は，事実上，全国に唯一の闘牛資料館であるが，集積された情報は徳之島のものに限定されており，日本や世界の他の地域の闘牛に関する情報は皆無である。即ち，闘牛情報のハブとなることを目指したものではない。

一方，奥州市の「牛の博物館」には牛に関するありとあらゆる情報が数多く集積されているが，残念ながら，闘牛に関する情報については，地元の闘牛情報も含めてほとんど集積されていない(12)。

では，「闘牛資料館」が闘牛ネットワークのハブとしての「闘牛博物館」へと昇格するためには何が必要であろうか。闘牛ネットワークの構築には，闘牛の生地，肥育地，闘牛としてのその後のライフヒストリーに関する詳細な情報を目に見える形で展示紹介する工夫が求められる。また，「全国闘牛サミット」など，国内の他の闘牛開催地の市町村役場や闘牛推進団体との連携の情報，そしてさらには，韓国や中国などアジア地域およびボスニアなどの東欧や西アジアその他，世界各地の闘牛開催地の情報等が集積され，かつそれらの地域とインターネットによって結ばれて，さらには国内の闘牛サミットを，まさに世界の闘牛サミットへと発展させていくような関係の構築が求められる。こうなれば，まさに国内のみならず世界のいわゆる「周辺」地域同士が闘牛を介してネットワークで結ばれるという，世界的レベルでの「周辺－周辺」ネットワークの状況が生まれる。闘牛博物館がこうした情報のハブとして機能すれば，全世界の闘牛に関心のある研究者の，情報へのアクセスが容易になり，急速に進展するグローバリズムの問題の解明の大きな手がかりとなるであろう。

闘牛サミット

闘牛サミットは，1998年に，隠岐の島町役場が全国闘牛サミット協議会事務局になって発足した(13)。その目的は，闘牛の貴重な伝統文化を有する市町村が一同に会し，文化の保存・伝承と相互の交流，親善を深めるとともに，伝統的資源を活かした個性豊かなまちづくりを図ることであった。

2005年５月３日午前，伊仙町の伊仙闘牛場で開催された「第８回全国闘牛サミット記念闘牛大会」には，徳之島内外から約5000人の闘牛ファンが参加した。鹿児島県知事，伊仙町町長，徳之島闘牛連合会会長，韓国清道郡の議会議長などが挨拶

し，また，新潟県中越地震で被災した山古志村（現長岡市）から徳之島に引き取られた闘牛が花形戦に新潟代表として登場し，話題になった。

また，徳之島闘牛連合会が主催して同日開催された第 8 回全国闘牛サミットには，全国の闘牛文化を守り続けてきた 5 県 7 市町村の首長や闘牛団体の代表者，そして韓国からも11名が参加した。サミットでは，全国の闘牛開催地同士のネットワークを構築し交流を深めるとともに，国外にも闘牛の魅力を発信していくことを確認し，闘牛文化を地域資源として活用していくことなどが話し合われた。

このように，今や闘牛は国境を超えて，民間主導で国際交流の促進にも大きく貢献しつつある。とりわけ，日韓両国のあいだでは，政治的相互理解が停滞していたなかで，日本の周辺部においては，闘牛を介した草の根の交流と相互理解が中央政治の頭越しに進んでいたのである。換言すれば，日韓の間でも，あるいは国内においても，国民の多くがその事実の存在さえ知らないところで，これまで長年に渡って闘牛文化を育んできた人たちが，闘牛を介して，ユニークな草の根の交流ネットワークを形成し，人とモノと情報の行き交う度合いが年々増しているという確かな現実が存在しているのである。そして2006年 9 月には，第 9 回となる全国闘牛サミットが，中越地震から復興間もない山古志で開催された。平成16年の新潟県中越大震災で壊滅的な打撃を受けた山古志では，全村避難を余儀なくされ，伝統ある闘牛大会も，これまで市町村合併した長岡市の仮設闘牛場で行われてきたのであった。被災後初めて山古志村で行われる闘牛大会には，遠く徳之島，沖縄，隠岐の島からも牛たちが戦いにやってきた。

2007年の10回大会は沖縄県うるま市が，全天候ドーム型の闘牛場完成の祝賀をかねて行うことになった。なお，第 9 回の闘牛サミットは新企画として，各市町村代表が今後の課題などについて所見を述べ合った。スピーカーは牛の産地である久慈市（旧山形村），次回開催地のうるま市，長岡に隣接し震災の被害を受けている小千谷市，隠岐の島町，徳之島町，伊仙町，長岡市の順番であり，牛の頭数確保対策，闘牛の観客増加策，BSE問題への対応など，闘牛を取り巻く文化社会的な問題に関する現状報告が，各市町村の行政関係者よりなされた。また，最後に第 9 回闘牛サミット宣言(13)が採択された。

「周辺－周辺」ネットワークの形成とその意味

以上，本稿で，我々は，周辺－周辺ネットワークの形成のエージェントとして，牛主，博物館，闘牛サミットについて見てきた。これらは，それぞれ，個人，地域，全国の各レベルにおいて，ネットワークの形成のハブとなりうるものである。個人のレベルでみれば，徳之島の牛主に限らず，どの牛主も闘牛あるいは子牛の買い付けのために徳之島，岩手県，新潟県，島根県，愛媛県，沖縄県の間を直接往来し，現地の人との間に牛の売買と情報のネットワークを形成している。このようなネットワークが存在するからこそ，中越地震に際して，山古志村の闘牛が徳之島に避難するということが可能となったのである。かくして牛主は，いわば不規則に移動す

ることによって無限にネットワークを増殖する関係構築的なエージェントとみることができる。また，徳之島の闘牛資料館や岩手県の牛の博物館にみるように，博物館は一地域に拠点を構え，外から引き寄せた人と情報とモノを新たな情報に変換して発信するハブとなりうるものである。さらに，闘牛サミットは，闘牛が行われている6県が毎年ローテーションで闘牛サミットの開催地となり，闘牛関係者ばかりでなく中央と直接間接に接点を持つ政治家や行政関係者をも一堂に集めて政治的・祝祭的・儀礼的パフォーマンスを行うことにより，闘牛開催地間のネットワークを強化する機能を果たす。これら3つが個人，地域，全国というそれぞれのレベルでネットワーク形成を通して交流密度を深めることにより，周辺－周辺ネットワーク形成のハブとなっているのである。

また，すでにみてきたように，現在の闘牛開催地と闘牛牛の生産地は，主に，離島・僻地・農村といった後進的・周辺的性格を有してきた地域であり，そのような地域同士が人や牛や情報の交流を行い，ひいては「全国闘牛サミット」のような交流の新たな展開を見せている。こうした事実は，単純に先進的な都市と後進的な僻地という「中央－周辺」的な二項対立図式では理解できない，むしろ「周辺－周辺」系の社会関係の存在意義を示唆するという意味で，きわめて今日的な特徴であると言える。換言すれば，闘牛に関係する地域間の交流の性格が，近代化・都市化してきた日本でこれまで支配的だった「中央－周辺」あるいは「都市－地方」といった二項対立的なものではなく，周辺同士が中央を介さずに直接結びついてネットワークを形成するという現状が水面下で進展しており，これこそが，まさに情報化時代のひとつの新しい交流形態のあり方を提示しているように思われる。

また，従来，中心－周辺（周縁）の議論で盛んにいわれたのは，中心に対する周辺の従属性や，逆に中心を活性化するものとしての周辺の存在であり，周辺は常に中央との関係でしかその存在価値を認められてこなかった。他方，闘牛開催地同士に見られる「周辺－周辺」ネットワークの形成においては，周辺同士が対等に関係しあい，なおかつ双方が活性化しあうという特徴を有する。即ち，周辺が他の周辺との関係においてその存在価値を発揮するのであり，そこには中央の介在を必要としない。こうして，闘牛における「周辺－周辺」ネットワークは，世界中の個人が相互にインターネットを介して関係し合うという情報のグローバル化と類似の様相を呈する。換言すれば，闘牛開催地間に見られる「周辺－周辺」ネットワークの形成は，グローバリゼーションの新たな入口の一つ，あるいはその進展度合いを映す様々な鏡の一つと言える。

む　す　び

以上，本稿では，闘牛を媒介にしたネットワーク形成の現状分析から，日本，韓国，中国など東アジア沿海地域における地域間交流の現状，および，日本国内の闘牛牛，牛主，闘牛開催地の各種団体，観客などを巻き込んで成立している広域的な社会ネットワークである「闘牛ネットワーク」に関して，その形成過程およびその

特質の分析を試みた。

まず，闘牛に関する先行研究について，個別地域の闘牛に関するものは多いが，闘牛が関係する地域間にまたがった闘牛のネットワーク形成に関する研究は皆無であることを確認し，本研究の位置づけを行った。次に，東アジアを構成する日本，中国，韓国における闘牛の現状について，いずれの地域も各国の中心に対して周辺に位置することを共通の特徴として指摘した。さらに闘牛ネットワークの形成要因として，牛主個人，博物館という地域情報集積体，そして闘牛サミットという全国的なネットワーク組織を通して，個人，地域，全国といった各レベルでのネットワークの形成過程について記述した。さらにまた，闘牛開催地間の「周辺－周辺」ネットワークの形成が，従来，常に中央に従属あるいは奉仕する存在でしかないという関係性の呪縛を解き，周辺同士がネットワークの形成を通して相互に活性化し合うという状況が存在することについても指摘した。すでに本稿で繰り返し見てきたように，日本国内において，また広く東アジア地域においても，現在闘牛が行われている地域は，主に，離島・僻地・農村といった後進的・周辺的性格を有してきた地域であった。そのような地域同士が人や牛や情報の交流を行い，ひいては全国闘牛サミットのように交流の新たな展開を見せていることは，単純な「中央－周辺」的な二項対立図式では理解できない，むしろ「周辺－周辺」系の新たな社会関係の存在可能性を有するという意味で，今日的な特徴であるといえる。そして，このような「周辺－周辺」ネットワークの形成が，一方において，周辺地域のグローバル化の進展度合いを映す鏡としての意義を有することも合わせて指摘した。さらに，本論中では言及することはできなかったが，闘牛開催地の中にはインターネットを通じた情報発信を行っているところもあり，情報化時代における地域文化のあり方を考える上で，今後さらに考察を深めていく必要がある。

註

1　本稿は，鹿児島大学多島圏研究センターの共同研究プロジェクトである「新・道の島々プロジェクト」の一環として行われている人文・社会分野研究「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク　形成の現状」の研究成果の一部である。

2　南日本新聞2005年５月４日。

3　現在東アジアでは，徳之島，沖縄本島，八重山諸島，宇和島，隠岐，新潟（長岡市，小千谷市），岩手（山形村），韓国全羅南道，中国貴州省，中国江蘇省で闘牛が行われており，1988年９月までは八丈島でも闘牛が行われていた（石井1990a： 33）。

4　闘牛は雄ウシ同士が角を突き合わせて順位を決定するというウシの本能を利用している。つまり，行為自体は人間が介在せずとも行われ，その意味では自然に属するといえよう。そして，それが文化としての闘牛となるためには，その行為を人間の娯楽として認識し，人為的コントロールを加えて期待したとおりに角を

突き合わさせる介入のみで十分なのである。即ち，複数の雄ウシが一地点に存在する限り，常に闘牛は偶発的に人間の娯楽として「発見」される可能性を秘めている。

5　隠岐島では闘牛のことを「牛突き」といい，その起源は承久の乱（1221年）で中ノ島に配流となった後鳥羽上皇を慰めるために始まったといわれている。牛突きは現在，島後のみに残り，神社に奉納する本場所は，８月15日の夏場所大会のほかに，９月１日の「八朔大会」，10月13日の「一夜嶽大会」の３大会がある。会場となる「隠岐モーモードーム」は1,200人収容の屋根付き牛突き場で，平成11年３月に完成した。本場所は，東西分かれての土俵入りから幕を開ける。清めの塩を撒く〈塩振り〉に先導され，芝切り，小結，関脇，大関，横綱の順に，出場するすべての突き牛が巨体をゆっくりと披露。甚句や神楽節を声高らかに謡い上げながら，家紋や牛の名乗り（四股名）が色鮮やかに染め抜かれた幟を持って歩く。隠岐の牛突きは，その習俗，民俗文化財的要素から，平成10年には町の無形民俗文化財に指定された（http://fish.miracle.ne.jp/mou-mou/index.html）。

6　新潟県小千谷では，闘牛は「牛の角突き」と呼ばれており，国の重要無形民俗文化財に指定されている。現在の岩手県の南部地方から鉄材，鉄製品を運んで来る荷役用の牛が定着し，農耕に使われるかたわら，屈強な牛が角突きを好んでしたことが，この地方の角突きの始まりだといわれている。ほかの地域の娯楽を目的とした闘牛と違い，お祭りを目的として行われてきた。昭和30年後半から昭和50年頃まで無くなっていたが，地元の有志により復活し，現在では重要な観光資源となっている。現在は年８回（５月～11月）の定期場所と，年間平均10回の観光闘牛を開催している（http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Oasis/2062/）。

7　新潟県長岡市（旧山古志村）でも，闘牛は，昭和38年頃に一時途絶えたが，山古志村観光協会により復活し，昭和53年５月に重要無形民俗文化財として国の指定を受けた。現在は年間９回（５月～11月）を４会場に分け開催している（http://fish.miracle.ne.jp/mou-mou/index.html）。

8　岩手県 久慈市（旧山形村）は古くから日本短角種の産地で，昔は主に農耕用や荷物を運ぶ役牛として飼養されていた。江戸時代に近隣の海岸で焚かれた塩を，牛の背に乗せ北上山地を超えて盛岡方面まで運んでいた。その際，先頭に立つ牛を決めるため牛の突きあわせをしたのが闘牛のはじまりとされている（千葉1987）。昭和58年からこれを観光行事として取り入れた。現在は，春のつつじ場所と夏のお盆場所の，年２回開催している。また，本村で育てられた牛が新潟県や沖縄県に買い取られ活躍してて，闘牛の育成の産地としても役割を担っている（http://fish.miracle.ne.jp/mou-mou/index.html）。

9　2005年10月22日と23日の両日に，徳之島の伊仙町と天城町で，それぞれ前夜祭と全島一を決める２つの闘牛大会が開催された。

10　清道郡庁の公式サイトの闘牛ページ（http://bullfighting.cheongdo.go.kr）および「晋州闘牛サイバーテーマパーク」（http://www.jinjubulls.com/）を参照した。

11　伊藤範久氏への聞き取り調査は2006年７月26日（水）の午後，徳之島闘牛資料

館の一室で行った。

12 「牛の博物館」の詳細については『奄美ニューズレター』（No. 27）に紹介したことがある（尾崎・桑原・西村2006b）。

13 現在，全国闘牛サミットを構成するのは，9市町村（岩手県久慈市山形町（旧山形村），新潟県小千谷市，同長岡市（旧山古志村），愛媛県宇和島市，鹿児島県徳之島町，同天城町，同伊仙町，沖縄県うるま市，島根県隠岐の島町）と，9団体（岩手県平庭闘牛大会実行委員会，新潟県（株）山古志村観光開発公社，同小千谷闘牛振興協会，愛媛県宇和島観光闘牛協会，鹿児島県徳之島闘牛連合会，兵庫県完済闘牛倶楽部，沖縄県闘牛組合連合会，同うるま市具志川闘牛組合連合会，島根県全隠岐牛突連合会）である。

参考文献

石井幹 1989．日本の闘牛－１－，畜産の研究 43⑿，1359－1362．

石井幹 1990a．日本の闘牛－２－，畜産の研究 44⑴，31－35．

石井幹 1990b．日本の闘牛－３－，畜産の研究 44⑵，249－253．

石井浩一 1992．愛媛県における闘牛興行の復興過程に関する研究，スポーツ史研究 5，pp. 25－35．

石井浩一 1993．愛媛県南予地方における闘牛について－幕末から明治期を中心に，愛媛大学教養部紀要 26⑵，1 －17．

石川菜央 2004．宇和島地方における闘牛の存続要因－伝統行事の担い手に注目して，地理学評論 77⒁，957－976．

雲南省民族事務委員会（編）1999．彝族文化大観，雲南民族出版社．

愛媛県教育委員会文化財保護課（編）2002．南予地方の牛の突きあい習俗調査報告書，愛媛県歴史文化博物館．

岡部隆志 2004．雲南省禄豊県高峰郷彝族の松明祭（火把節）について，アジア民族文化研究3，35－49．

尾崎孝宏・桑原季雄・西村明 2006a．東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状，鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第63号，31－58．

尾崎孝宏・桑原季雄・西村明 2006b．闘牛をめぐる情報発信とネットワーク形成，奄美ニューズレター，No. 27，鹿児島大学，9 －17．

金華県誌編纂委員会（編）1992．金華県誌，浙江人民出版社．

桑原季雄・尾崎孝宏・西村明 2006．東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状予備調査報告２－八重山調査より，鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第64号，51－83．

董紹禹・雷宏安 1985．納西族東巴教調査，雲南省編輯組（編）雲南民族民俗和宗教調査，雲南民族出版社，244－273．

国家民委民族問題五種叢書編輯委員会《中国少数民族》編写組（編）1981．中国少数民族，人民出版社．

小林照幸 1997．闘牛の島，新潮社，東京．
謝花勝一 1989．牛国沖縄・闘牛物語，ひるぎ社，沖縄．
全国人民代表大会民族委員会弁公室（編）1958．台江県苗族的節日，出版者不明．
宋恩常 1985．雲南四個地州彝族婚姻和習俗調査瑣記，雲南省編輯組（編）雲南民族民俗和宗教調査，雲南民族出版社，1 －16．
蘇夏（調査整理）1986．路南圭山彝族撒尼支社会歴史調査，雲南省編集組（編）雲南彝族社会歴史調査，雲南人民出版社，286－303．
曽我亨 1991．徳之島における闘牛の飼育とその分類・名称・売買の分析－人々はいかに闘牛を楽しんでいるか，日本民俗学 188，1 －48．
千葉明 1987．岩手のあか牛物語，岩手出版，岩手．
陳士林・辺仕明・李秀清（編）1985．彝語簡誌，民族出版社．
西村明・桑原季雄・尾崎孝宏 2006．沖縄，徳之島および宇和島の闘牛に関する比較研究，塚原潤三・長嶋俊介編南北連続「新・道の島々」センサーゾーン拠点形成～地球温暖化学際研究前進拠点と国際・地域貢献～，南太平洋海域調査研究報告 No. 46，167－179．
広井忠夫 1998．日本の闘牛：沖縄・徳之島・宇和島・八丈島・隠岐・越後，高志書院，東京．
広井忠夫 2002．国指定重要無形民俗文化財越後闘牛と伊予闘牛の習俗の比較，高志路 346，10－22．
藤原弘 2001．研究発表会講演要旨岩手県釜石市橋野町和山牧場における短角種牛選抜角突き合わせ（闘牛）の変遷について，日本獣医史学雑誌 38，76－78．
穂積重信 2004．闘牛いまむかし，松本泰文・田畑千秋編〔現代のエスプリ〕別冊奄美復帰50年，至文堂，東京，203－209．
前宮清好 1972．沖縄の闘牛，石川製パン所，沖縄．
馬寅（主編）・君島久子（監訳）1987．概説中国の少数民族，三省堂，東京．
松田幸治 1982．徳之島の闘牛，南国出版，鹿児島．
松田幸治 2004．闘牛研究，南国出版，鹿児島．
山田直巳 2001．徳之島の闘牛：文化論的考察，民俗学研究所紀要 25，37－64．
山田直巳 2002．隠岐闘牛の儀礼的世界（上），民俗学研究所紀要 26，25－47．
山田直巳 2003．隠岐闘牛の儀礼的世界（下）：都万村「八朔牛突き」を軸に，民俗学研究所紀要 27，71－104．
山田直巳 2004．闘牛の社会経済的考察：徳之島社会研究への予備的アプローチ，民俗学研究所紀要 28，193－217．
李近春（収集整理）1986．麗江納西族的文化習俗和宗教信仰，雲南省編輯組（編）納西族社会歴史調査㈡，雲南民族出版社，28－66．
李澤奉・劉如仲（編著）1997．清代民族図誌，青海人民出版社．

ウェッブサイト

沖縄県　http://www2u.biglobe.ne.jp/~office21/index.html（2006年11月15日閲覧）
鹿児島県徳之島　http://www4.synapse.ne.jp/nakusami/（2006年11月15日閲覧）
愛媛県宇和島市　http://www.tougyu.com/tougyu/index2.html（2006年11月15日閲覧）
島根県隠岐　http://fish.miracle.ne.jp/mou-mou/index.html（2006年11月15日閲覧）
新潟県小千谷市　http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Oasis/2062/（2006年11月15日閲覧）
清道郡庁の公式サイトの闘牛ページ：http://bullfighting.cheongdo.go.kr（2006年11月20日閲覧）
晋州闘牛サイバーテーマパーク： http://www.jinjubulls.com/（2006年11月20日閲覧）
金華闘牛　http://www.517jh.com/letter/show.asp-id=701（2006年 9 月12日閲覧）
金華新聞　http://www.jhnews.com.cn/gb/content/2003-02/28/content_158288.htm（2006年 9 月12日閲覧）
浙江省の民俗風習　http://www.tourzj.jp/gaikyo05.html（2006年 9 月12日閲覧）

新聞記事

南日本新聞　2005.5.4.
銭本隆行　2004．慰みの闘牛，産経新聞，11月12日夕刊